

原田市太郎先生の思い出

浜島繁隆

原田市太郎先生との出会いは、1958年の夏、今は移転してないが、知多半島の新舞子にあった東大の臨海実験所でした。その頃、先生は名古屋大学におられ、細胞学の実験材料となるホソエガサ (*Acetabularia calyculus*) を近くで採集できる所を捜しておられました。私が1956年伊勢湾の常滑市沖で、この熱帯性の海藻ホソエガサの自生地を発見し、それを研究誌に報告していたので、その自生地に案内するよう依頼されたのです。書類・資料を入れた風呂敷包みをわきにかかえた温厚なお姿が今も脳裏に浮かんできます。その日は海に舟を出しましたが、潮の関係で採集できず、後日、地元の人が採集したホソエガサを届けることで、責任を果たすこと

ができました。

それから20年ほどはお会いすることもなかったのですが、水草同好会を作るということで再び先生に指導をうけることができるようになりました。研究の別刷などをお届けすると、“講義に少し使わせてもらったよ” といったご返事などいただき勇気づけられました。また、水草の中で *Najas* が不明のところが多いので研究を進めるようにともアドバイスをいただきました。このようなアドバイスを受けながらも、成果の報告をすることなく、先生が帰らぬ人となり大変残念に思っております。先生のご冥福をお祈りいたします。

一博物エピキュリアンのつづやき (最終講義資料)

1980(昭55)年2月29日 原田市太郎

1 原市というおとこ

2. ふしぎに“いのち”永らえて

仮死状態で出産したとか。幼時から大病の連続。まわりも自分も「……とても、おとなまで保つまい……」と危惧。

東大・理・植物は当時、入学定員8名。入学した同期生8人のうち、途中で他学部へ2人移ったので、昭和16年に卒業したのは6名。その年の暮れに“大東亜戦争、ぼっ発。“終戦”になってみたら、次の如し。

2名：支那大陸で戦死

1名：工場動員で病没

2名：戦役に服し、生還

1名(原田)：なにごともし

いく度か召集をうけて営門をくぐりましたが、虚弱のためいつも即日帰郷。結局3人だけになりました。“日露戦役”の軍歌「戦友(ここは御国を何百里)」の一節“……不思議に命永らえて……”を、しみじみと感じております。

因みに、同期の動物学科もやはり8名入学しましたが、戦死・病没などで、やはり3人しか生き残っていませんでした。しかるに先年、北大理学部で同僚として十数年をともにした玉重君が急逝され、うたた感無量。

3. 博物学で身すぎ世すぎのこと

(i) 生物のことは何も知ってなかった。

東京本郷の“街っ子”育ちなので、山野の自然は知りませんでした。高校理乙へ進んだのは「……医者になれば食いはぐれない……」ぐらいに、まわりから奨められた程の理由。

高校では生物クラブにちょっと顔を出しましたが、とくに生物学に強い関心があったわけではない。高校は諸般の事情で5年もやりましたが、小説のラン読と酒のガブ飲みに見つを抜き、青春の浪費をしただけ。

(ii) 植物学科へ入った動機。

大学へ行くとって“実学的”な方面に気が向かず、文学部か理学部へと思いました。理・植物を受けたのは、今にして想えば、次のような諸要因の複合結果で